

女性蔑視

赤谷慶子

森喜朗元首相の「女性の話は長ければ、会議長くなる」発言より、女性を軽視する問ひ沸き上がり、辞職まで追ひ込まれき。当人は格別さは差別ならんとは思はざりしが如し。これまであまたの会議見たれど、特段女性の話し長きには非ず、男女問はず人それぞれによらずや。彼の辞任を機に降つて湧きたるが如くに五輪大会関係団体は女性幹部の登用を実現せむと躍起になれり。あやしき話なり。

おほかた、日本のあらゆる分野において女性登用は餘の国々に遅るること甚だしきものあり。世界においてもほぼ最低水準なり。その事実改善せむとの思ひより出でたらむや、掛け声ばかり先走り、実態はつきゆかず。日本社会構造の改革なしに、この有様は変はらざるらむ。日本の制度そのものの中に、女性の社会進出を妨ぐる要因の存するに非ずや。

学校教育の他、家庭内教育も改むべきならむか。現今は多少なりと改革せられたらめど、吾子供の頃は「女子なれば、男子なれば何々すべからぬ、すべし」と親は教ふ。これを改めずば、成長過程におきて既に差別化せらるるに至る。世にいづる以前に差別の壁にうち当たれるなり。

中学生の頃、母親に「女の子」なれば、お転婆過ぎ、いまし行儀良くしたまへと言はしめし事象頻繁なり。父はいと多忙にて不在なること多く、我が母より説教せられたるを聞く事も滅多になかれど、さるほど「これよりは男女平等の世の来るらむ、女子なれば、といふしかり方は止めたまへ」と介入しきたり。かくておのれ十八歳の誕生日を迎へたる日に父は、「男女平等になる世は時ならずして来るべし。結婚は最終就職ならず。おのれの才を十分に發揮せらるる職業につき、一人にても生きてゆかるるやう、ひしと勉強する事会得せよ。」と言ひき。ウーマンリブといふ言葉未だ聞かれぬ頃なれば、まことにかかる世の来るべしやと面食らひし記憶あり。人生の節目の折り、父は我にゆくすゑの格言を与へき。おほかた父の見通しは当たりており、後に感謝すること多かりし。戦前の英オックスフォード大学に留学せられた父はラテン語も勉強し、ビジョンを持ちて人生を歩みこしの証と吾は思ひき。日本にも男女雇用機会均等法制定せられ、女性も男性と同様に働く機会を与へらるるらむと思ひきや、達成するはなかなか壁高く、道のりは未だ遠し。

(令和三年三月二十八日受附)